

皆様のご支援が学生たちの未来を支える

開学100周年記念事業募金「諸澤幸雄奨学金」奨学生決定



▼奨学生に決定した常磐大学・常磐短期大学の学生たち。
 ▲諸澤英道理事長から奨学生らに、奨学生決定通知書が手渡された。

2 009年に開学100周年を迎えた学校法人常磐大学では、記念事業の一環として「諸澤幸雄奨学金制度(給付型)」を設けた。本法人の発展に大きな貢献をした諸澤幸雄の名前を冠したこの奨学金は、心身・学術ともに優れ、経済的に学業の継続が困難となった者(I種)、または家計状況が急変し、経済的に学業の継続が困難となった者(II種)に対し、奨学金を給付し公平な修学機会を与えることによって、有為な人材の育成に資することを目的とした制度である。この奨学金は、諸澤幸雄の遺族からの寄付を原資とし、皆様からの心のこもった寄付金を加えて運用されている。未来への新しい一歩を踏み出そうとする学生・生徒を支援するものだ。

10月6日、制度ができてから初めての奨学生に対し、奨学生決定通知書が諸澤英道理事長より一人ひとりに手渡された。I種奨学生として9名、II種奨学生として3名の計12名の常磐大学・常磐短期大学の学生に、諸澤理事長から「募金趣旨に賛同してくださった方々の寄付金でこ



の奨学金制度ができました。今後の学生生活に目標を持って、これからの人生のことを考えながら将来に備えてください。後輩たちの模範になるような学生生活を送って欲しいと思います。頑張ってください」と激励のことばが掛けられた。

奨学生からは、「先輩方や多くの方々からの寄付があって、この奨学金をいただけたことに感謝します。これを励みに勉学に勤しんでいきたいと思います」とお礼のことばが述べられた。

学校法人常磐大学では、厳しい経済状況においても多くの学生・生徒が学業に専念できるよう、今後も継続的に奨学金を給付する考えだ。

◆諸澤幸雄奨学金とは…諸澤幸雄は、60年にわたり理事長、短期大学長、高校長、幼稚園長などを務め、学校法人常磐大学の発展に寄与した。この奨学金制度は、このような諸澤幸雄の功績を讃えて創設されたものである。多くの方々からのご寄付で賄っているこの奨学金は、学生・生徒の経済的支援を目的とした給付型奨学金である。

多言語・多文化社会におけるこれからの教育

—違いを超え、豊かな個を育むために—

● 教育実践研究所 2010夏期シンポジウム開催

日本で生活する外国人を取り巻く社会的環境を考える、学校法人常磐大学教育実践研究所・2010夏期シンポジウムが、8月26日、27日、28日の3日間、常磐大学で開催された。

現在、茨城県には約57,000人の外国人登録者が居住している。この数は年々増加する傾向にあることから、私たちの身近なところで「内なる国際化」が進行していることが分かる。それに伴い、外国籍の人々との共生社会は家族・学校・地域社会・職場などさまざまなところに及び、実質的な現状の情報を発信することの必要性は高まっている。

このような社会状況を踏まえ、このシンポジウムでは、その背景的な知識に加え多文化共生社会における教育に焦点を当て、これからの展望について考察。最終日には、提言がまとめられた。さまざまな国から研究者が集まり開催されたこのシンポジウムは、世界から学び日本の現状をしっかりと見つめる、非常に有意義な3日間となった。



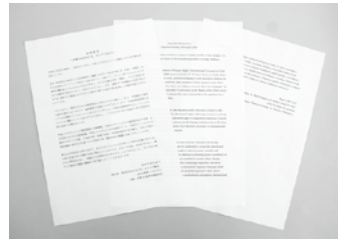
●基調講演① Joseph F. Kess (カナダ・ヴィクトリア大学名誉教授) / 「カナダにおける移民、民族性、多文化主義」というテーマで、二言語主義と多文化主義の政策をとるカナダの実情から、そのプラス面とマイナス面を分析。また、移民たちの暮らしが、民族性と国民性の問題にどのような影響を与えるのかを考えた。



●基調講演② 山田 泉 (法政大学キャリアデザイン学部教授) / 「多文化社会における日本語教育」というテーマで、文化の多様性を個人や社会の豊かさとするため、日本語教育が外国人等日本語学習者側と日本人側の双方の学びに貢献する方法について考察。言語と文化の密接なつながりについても言及した。



●シンポジウム「多言語・多文化社会における教育の展望」/ 茨城県の多言語・多文化社会における教育の現状と課題について、教育を提供する立場、教育を受ける立場、それぞれの経験に基づく考えを発表。3日間を総括した提言をまとめた。また、このシンポジウムには、外国籍を持つ常磐大学の学生3名も参加した。



●常磐宣言～日本の社会のいま、そしてこれから～/ 分科会やシンポジウムの議論を基に、今後の多文化教育のあり方をまとめた共同宣言。日本人児童と外国籍児童が互いの言語・文化を学び合い、豊かな人間関係を培い、多様化する国際社会に寄与することができるよう、緊急の課題に取り組むことが宣言されている。

プログラム

8月26日(木)

■基調講演①

「カナダにおける移民、民族性、多文化主義」

Joseph F. Kess (カナダ ヴィクトリア大学名誉教授)

8月27日(金)

■基調講演②

「多文化社会における日本語教育」

山田 泉 (法政大学キャリアデザイン学部教授)

■分科会

「日本人とともに生きる」

デ マトス・マリア ダ コンソラサンウ
(カトリック常総教会、イエズス孝女会メンバー)

西澤 弘行 (常磐大学人間科学部教授)

「スイスと日本における子育ての経験」

C.R. Bussinger (常磐大学国際学部准教授)

「日本社会におけるポルトガル語教育」

高阪 香津美 (愛知県立大学外国語学部専任講師)

「多文化社会における適応と共存のテーマ

—教育者と精神衛生の専門家の役割と社会的責任—

石山 一舟 (カナダ プリティッシュコロンビア大学准教授)

「大洗のインドネシアン・コミュニティ」

北根 精美 (常磐大学国際学部准教授)

坂本 裕保 (NPO マナドネットジャパン副代表)

「学力世界一を可能にしたフィンランドの社会と教育」

坂根 シルク (翻訳家、コンサルタント)

「ドイツにおける移民問題と教育」

G.F. Kirchhoff (常磐大学大学院教授)

8月28日(土)

■シンポジウム

「多言語・多文化社会における教育の展望」

【コーディネーター】

津田 葵 (常磐大学国際学部教授)

【話題提供者】 発表順

岩本 郁子 ((財)茨城県国際交流協会事務局長)

北根 精美 (常磐大学国際学部准教授)

蔦谷 友紀恵 (常磐大学国際学部在籍)

大城 廣亀 (常磐大学国際学部在籍)

西山 アケミ (常磐大学国際学部在籍)

井坂 眞理子 (水戸市立五軒小学校教諭)

大内 英子 (大洗町立大貫小学校教諭)

吉田 マリア シズ子 (日本ブラジル学校協会会長)

デ マトス・マリア ダ コンソラサンウ

(カトリック常総教会、イエズス孝女会メンバー)

高阪 香津美 (愛知県立大学外国語学部専任講師)

第3回開学100周年記念講演会 現代科学でも解明できない人間の本质を 藝術との関わりを通して認識する

第3回学校法人常磐大学開学100周年記念講演会が、9月25日に情報メディアセンター・センターホールで開催された。講演者としてお招きしたのは、早稲田大学理工学術院表現工学科教授で画家の藪野健氏。過去の偉大な藝術家たちの創作活動を通し、現代の科学でも解明できない人間の本质を解き明かすヒントを講演していただいた。藪野氏は藝術作品の創り手と同時にその表現を受け取る側の存在も重要だとし、日頃から藝術とふれあう重要性を強調。人間とは本来とても自由な存在であると語った。時に難解で哲学的な話題をウイットに富んだ語り口で楽しく話す藪野氏の講演に、来場者は時間を忘れて聴き入っていた。(関連4面)



TOKIWA COLUMN

ときわコラム

未知の世界へのフロンティア —One-Way Ticket to Mars

◆ 諸澤 篤子 (学校法人常磐大学 常任理事)



アリゾナ州立大学の物理学教授でサイエンスライターの Paul Davies 等が火星への one-way ticket を勧めている、という記事が、11月18日付けの Japan Times に載っていた。

今や地球を離れて新天地を求めなければならない、という SF 小説のような事態が、現実になりつつあるようだ。

でも、なぜ行ったきり帰らない片道旅行なのだろうか。彼らの考えは、片道であれば運賃が安く20年以内に実現可能だし、なにはともあれ誰かがまず行って開拓してこなればどうにもならない、というのである。自殺の勧めではないか、という批判も載っている。

確かに無謀な話かもしれない。しかし人類の歴史を思い起こしてみると、開拓と未知のものとの遭遇の連続ではなかったか。そしてその開拓者たちのほとんどは one-way trip に挑んでいた。北アメリカ大陸に最初に移住してきた人たちも例外ではない。帰ることなど考えていなかっただろう。彼らの人生観、世界観はどのようだったのだろうか。

歴史をさかのぼり、古代ローマ人たちが初めて北ヨーロッパに遠征し、新天地に立ったときの様子は、Tacitus という歴史家が紀元97年頃に書いた本*を読むとよくわかる。

白夜の海の彼方を見て、そこは神々の住むところだ、と言う。その証拠として、太陽が一晩中そこに留まっていることを挙げ、その傍らには神の乗る馬が見える、と言う。深い森の向こうには、身体が獣で頭が人の種族がいるようだが、まだ出会っていない、とも記述している。未知の世界は、彼らのすぐそばにあったのだ。

今、私たちは自分を取り巻く外界について多くのことを知っているし、世界中の出来事が瞬時にして手に取るようにわかる時代の中にいる。そして、自分たちの人生もざっと見渡せるような生き方をしている。もちろん先に何かがあるかはわからないが、大体が予測の範囲内だ。また、わかった事柄や慣れ親しんだもの・人たちからきっぱりと決別するような人生を、多くの人はやろうとしないし社会もそれをさせない。

しかし、このような人生観・世界観は、人類、あるいは人間たちのものとしてはむしろ例外なのだろう。

* Tacitus, P.C.: Agricola and Germania (translated by Harold Mattingly 1948), Penguin Classics [London] 2009.

Tokiwa Interview

第3回 学校法人常磐大学 開学100周年記念講演会(2010年9月25日開催)より

藝術の可能性

—今日のコミュニケーションや社会生活の閉塞状態を打破する方法として—

藪野 健氏(画家)

現代社会に於いて、人間関係の構築は重要なテーマだ。しかし、人の思考は科学で解明することが困難な領域。相手を理解し自分を伝えることはきわめて難しい。そこで、私たちが藝術から学ぶべきこととは何か、画家の藪野健先生にお話を伺った。

「藝術とは何か。これは、非常に難しい問題です。ところが、答えは簡単であると言った人物がいます。それはフランスの作家アンドレ・マルローです。彼は『藝術はアンチ・デスタン』、運命に対向するものだと言っています。さらに『私は藝術家より藝術作品を信じる』とも言っています。これは、藝術は作品の創り手に目が行きがちだが、作品を受け取る側も重要であるということ。この関係は、野球の投手と捕手に似ています。捕手は投手から球を受けたら投手に返さなければならない。そういうやり取りが藝術の根源にはあるのではないのでしょうか」

運命に対向し人生を変える藝術も、受け手の存在が重要となる。両方の関係があって初めて藝術表現が意味を持ち、社会や生活の中に入り込むのだ。

「スペインの詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカは、こう言っています。『詩を作る上で大切なのは、想像力・靈感・逃避の3つで、これを支配しているのがビジュアルである』と。つまり、詩も言葉で書いているが、見えている世界のように再現できるものが詩としての命を持っているということです」

言語や視覚といったカテゴリーに縛られることなく、藝術は受け手にアプローチを仕掛けてくる。

「フランスで活躍したドイツ人の画家ヴォルスは、物を見つめるときは目を閉じると言っています。これは目を閉じるときわめて的確に自分の意識世界の何かを掴むことができるということ。さらにサルトルが彼に捧げたオマージュの中で『繰返されることなく繰返される、港のさざ波』という表現を使って

藝術表現を受け止めることの重要性を考える。

いますが、これが最も大事な部分に近いのではないかと思います。繰返す港のさざ波というのは心臓の『鼓動』。つまり藝術を表現することは、生きているということとほとんどパラレルの関係なのです」

さらに、その「生」をも超越した領域で創作活動を行った藝術家もいる。

「ドイツの画家パウル・クレーは、絵描きの役割は『見えないものを見えるようにすること』だと言いました。また彼の墓石には『私はこの世では理解されない。なぜなら生を受ける前の世界に、そして死者の世界に私はいるのだから』と刻まれている。見ること、つまり存在の立脚点を生前と死後に置いているのですから、こんなに自由なことはありません」

哲学的で難解ではあるが、私たちは作品を受け取る側として藝術に参加することが可能だ。

「藝術家というのは、絵画や音楽や建築の専門家ではないのだと私は考えています。藝術の本質は教育することがきわめて難しい、人間に本能的に備わったインスピレーションのようなものだと思うからです。だから、もっと多くの人たちが積極的に藝術を語るべきなのです」

現代社会では多くの事柄が数値化され、高度に発達したICTは、コミュニケーションにさえ効率化を求めている。しかし本来、人間とはもっと自由で解き放たれた存在なのだ。そして、そのことを再認識するためにも、私たちは積極的に藝術と関わる必要があるのではないだろうか。



やぶの・けん(画家) ●1943年名古屋生まれ。1969年早稲田大学大学院文学研究科修了。1970-71年マドリッド サン フェルナンド美術学校留学。昭和会展優秀賞、安井賞展佳作賞、二紀展文部大臣賞、日本藝術院賞等受賞。現在、日本藝術院会員、社団法人二紀会副理事長、早稲田大学理工学術院表現工学科教授、同文化遺産藝術工学研究所長。

● 2010年度卒業予定者の就職状況と2011年度卒業予定者の就職支援について

2010年度は前年度に続いて多くの企業等で採用抑制や厳選採用の方針を継続していることから、学生にとって大変厳しい就職環境となっている。このため、常磐大学・常磐短期大学においても引き続き就職活動を続けている学生が少なくない状況にある。

学生支援センターでは、こうした状況に対応するため、キャリア支援担当職員に加えて、キャリアカウンセラーによる個別就職相談会を定期的に開催し、学生ごとにきめ細かな就職指導を実施している。また、茨城県のジョブカフェ、ハローワーク、茨城県福祉人材センター等と連携し就職相談や求人先を紹介。さらに、県内他大学や茨城県、茨城労働局等と求人状況や対応策についての情報を密に交わし、一人でも多くの学生が内定を獲得できる環境醸成に努めている。

また、就職環境の急激な好転は期待できない状況の中、来年度の就職試験に挑む学生に対しても早期の就職支援プログラムを実施。例年多くの学生に現在の就職環境を肌で感じ、少しでも早く、各々の就職意識を高めることを目的に、都内で開催される企業合同説明会へのバスツアーを企画している。11月20日のツアーには、475名の学生が参加。これは前年を100名以上も上回る参加状況であり、学生の就職活動への意識の高まりを感じることができた。



①就職活動へと意識を切り換える学生たち。②説明会は東京ビッグサイトで開催された。③全国から多くの学生が参加した。

ツアーに参加した国際学部経営学科3年の佐藤正徳さんは、「採用に対する、企業の真剣な思いが伝わってきました。今日、興味を持った企業もあるので、説明会の日程を調べて参加しようと思っています。今は不安でいっぱいですが、最後まで諦めず頑張ろうと思います」と気を引き締め、短期大学キャリア教養学科1年の江橋愛さんは、「会場に集まった学生たちの意識の高さに驚きました。短大は2年間という短い期間の中で、授業と就職活動を両立させなければならないので大変ですが、早めの行動で周りに差をつけ、余裕を持って活動に取り組みたいです」と、抱負を語っていた。

● 地域社会との連携を深める第13回常磐フォーラム開催



第13回常磐フォーラムが、10月14日、水戸京成ホテルで開催された。このフォーラムの目的は、地域社会と常磐大学・常磐短期大学との連携を深めること。著名な先生の講演のほか、企業と大学との貴重な情報交換の場としても大いに活用され、就職支援においても成果を上げている。今回、講演を行ったのは、東京大学特任教授でNPO法人産学連携推進機構で理事長を務める妹尾堅一郎氏。『事業競争力のからくり～「知を活かす



◀代表してプレゼンテーションを行った5名の学生。常磐大学&水戸ホーリーホックコラボデーでのイベントをメインに実績をアピールした。



知」を開発できれば、世界的な中小企業を生み出せる～」というタイトルで、現在の日本企業が抱えている課題を分析し、その打開策などについて解説した。妹尾氏は既成概念を覆す講義を、実体験を交えながら展開。不況による閉塞感からの突破口となる内容は、参加者たちの心を捉えていた。

講演に続いて、常磐大学における実学の取り組みとして、国際学部経営学科水戸ホーリーホック・プロジェクトチームの「入場者数拡大に向けたスタジアムプロデュース」を紹介。学生たちは実際に自分たちが企画・運営したイベントなどのプレゼンテーションを通して、プロジェクトの成果をアピールした。

常磐大学・常磐短期大学

News!

第10回アジア地域大学院コース開講 さらなる被害者学の発展へ



●熱心に聞き入る受講生。

常磐大学国際被害者学研究所と世界被害者学会が主催する「アジア地域大学院コース—被害者学および被害者援助論—」が、8月2日から13日までの2週間にわたり、常磐大学見和キャンパスで開催された。常磐大学での開催は、アジア地域におけるホスト校として開講した1998年以来、今年で10回目を数える。

今回のコースには、インド、インドネシア、ネパール、中国、アメリカ、そして国内から23名が参加。関係機関視察なども含めた全日程に参加し、「プロジェクト計画書」の作成・発表を終えた21名が、コース最終日に修了証書を手にした。また、ボランティアスタッフとして17名の常磐大学の学生がコース運営に協力。各国からの参加者をサポートしながら、生きた英語を学ぶ機会を得ることができた。

閉講式では、これまで数多くの学生や若手研究者をこのコースに導いてきた国立インドネシア大学法学部ファチリ・ベイ教授から「私たちは、毎年このコースで、沢山の人々に出会い、最先端の被害者学・被害者援助論を学んできました。インドネシアのできるだけ多くの学生にも、この素晴らしい環境で学ぶ機会を与えた

いと考えてきました。しかし、経済的にも、時間的にも、日本で行われるコースに参加できる人はほんの一握りです。来年は、この“アジア地域大学院コース”を、是非インドネシアで開催させてもらいたい」という提案があり、会場に力強い拍手が溢れる場面も見られた。

アジアの地を代表して常磐大学で蒔かれた被害者学の種が、確かな芽を育み、実をつけるまでに成長した。そして、2011年度、被害者学は新たな地でさらなる発展のステージを迎えようとしている。インドネシアでのコース開講にあたっては、国際被害者学研究所も全力でバックアップする計画である。



●修了証書を手にした参加者と教員・スタッフ。



●8月7日には、アジア地域大学院コースを主催している世界被害者学会の理事会も常磐大学で開催された。



韓国の大邱サイバー大学と連携協力協定を締結

国際的な視野を持つ人材の養成を目指す常磐大学では、9月9日に韓国の大邱サイバー大学と連携協力協定を結び、調印式を行った。

今回の連携協力協定は、両大学の学術交流を促進し確立することを目的としている。これにより、両大学の研究教育プログラムに研究者、管理者、専門職員ならびに学生が積極的に参加することが実現し、双方にとって利益となるような領域で協力することや、特殊ニーズに応じた連携プログラムを検討することなどが可能になる。

今後、手始めとし、常磐大学人間科学部心理学科との共同研究プロジェクトが立ち上がる予定である。



●大邱サイバー大学のリ・ユンセ学長(右)と常磐大学の高木勇夫学長(左)。

常磐大学高等学校 ー常磐大学 & 水戸ホーリーホックコラボデーを通してー

News!

プロサッカーの試合から連携や協力の大切さを実践的に学ぶ

8月29日に行われた常磐大学&水戸ホーリーホックコラボデーでは、男子サッカー部がボールパーソン(写真①)、担架隊のほか、試合後の撤収作業にも携わった。また、チアリーディングは水戸ホーリーホックのチアリーダーである「ホーリーズ」と共に、大勢の観客が見守るスタジアム内で試合前とハーフタイムにダンスパフォーマンスを披露した(写真②)。

プロサッカーの試合を間近で体感できた生徒からは、「プロサッカーの試合の緊張感を味わえた」「試合中の選手たちのコミュニケーションを学んだ」などの感想が聞かれた。

また、生徒たちは、サッカーの試合運営には選手だけではなく、多くのスタッフが関わり、それぞれの役割をしっかりと担うことで成り立っていることを実感できたようだ。協力することの大切さと、同時に一人ひとりが責任を持って行動することの大切さを学ぶことができた。多くの気づきを得た生徒たちにとって、今回の経験は貴重な機会となった。



①



②

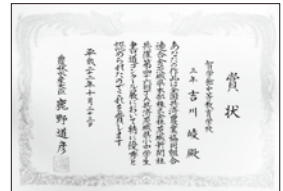
智学館中等教育学校

News!

書道コンクールで文部科学大臣奨励賞と農林水産大臣賞を受賞!



3年次の吉川峻さんが、第39回サンデー毎日学生書道コンクールで、全国の中高生が応募した19,202点の中から1人にだけ与えられ、実質的な1位となる文部科学大臣奨励賞を受賞した。また、吉川さんは第46回JA共済茨城県小中学生書道コンクールで農林水産大臣賞(金賞・1位)も受賞。多くの団体から、才能を高く評価されている。吉川さんは「賞を取ること大切ですが、自分で納得することができ、人の心を動かせる作品を書きたいです」と、謙虚に受賞の感想を述べていた。



常磐大学幼稚園

ー水戸ホーリーホックとの連携事業を通してー

News!

“本物”に触れることで広がる興味、育む好奇心

8月29日に行われた常磐大学&水戸ホーリーホックコラボデーでは、年長児22名がエスコートキッズを務め、選手たちと手をつなぎ元気よくピチに入場した(写真①)。貴重な体験や大きなスタジアムでの試合観戦を経験した園児の中には、サッカーへの興味関心が高まり、新たにサッカー教室に通い出した子もいたほどである。

また、コラボデーをきっかけにし、10月2日に開催されたアスレバル(2010年度 運動会)では、年長サッカー「頑張れ! トキワのげんキッズ★」の競技に結びついた。年長児一人ひとりがゴールに向かってキックする度に、年中組が中心となった応援合戦で、盛り上がりを見せた。

サッカー遊びを通し、アスレバルでの年長児のはつらつとした姿に大いに刺激を受け、その後の保育の中でも、盛んに異年齢交流が行われている。



①



●スタジアム内での「ホーリーくんぬりえ展示」。

学長選任のお知らせ

11月26日の理事会において、常磐大学・常磐短期大学の学長高木 勇夫 氏の任期満了に伴い、現在、学校法人常磐大学 常任理事の森 征一 氏が常磐大学・常磐短期大学の学長に選任されました。任期は2011年4月1日～2015年3月31日までの4年です。

schedule

2010年度学事日程 (1～3月)

月	日	内 容
1	6	(智)第2回入試
	7	(大・短)授業再開 (智)第4学期始業式
	11	(高)(幼)第3学期始業式
	15	大学入試センター試験(1/16まで)
	18	(大・短)定期試験・補講期間(1/31まで)
	23	(短)試験入試
	25	(大・短)創立記念日
29	連続市民講座 講演編⑥	
2	1	理事会
	4	(大)A方式・留学生・帰国子女試験
	12	連続市民講座 シンポジウム編②
	17	(院)春semesterⅡ期試験(修士)
	18	(院)春semesterⅡ期試験(博士)
	19	第4回開学100周年記念講演会(土井香苗氏)
3	1	(高)卒業式
	3	(院)3研究科合同修論発表会
	4	(大)B方式・社会人・編入学(B日程)試験
	5	連続市民講座 講演編⑦
	12	(大・短)第5回オープンキャンパス
	17	(幼)修了式
	18	(幼)終業式
	20	(院)学位授与式(12:30～13:00) (大)卒業式(10:00～11:10) (短)卒業式(13:30～14:40)
	22	(高)修了式 (智)修了式
	23	評議員会、理事会

※諸般の事情により日程が変更になる場合があります。

連続市民講座のご案内

〈講演編〉第6回●1月29日(土) 水嶋 英治 教授
「心の成長と地域文化の発展
—水戸市の世界遺産登録推進運動を通して—」

〈講演編〉第7回●3月5日(土) 津田 葵 教授
「多文化理解への挑戦—双方向型教育に向けて—」

〈シンポジウム編〉第2回●2月12日(土)
人間科学部 健康栄養学科
「食から支える茨城の超高齢社会」

【問い合わせ】常磐大学地域連携センター
TEL. 029-232-2652 FAX. 029-232-2861

寄付者ご芳名 (敬称略) [2010年8月～10月受付分]
ご厚情に深く感謝し、以下のとおりご報告いたします。

■教育実践研究所の行う事業支援

260,000円 諸澤 篤子 *

■諸澤幸雄奨学金の創設・充実

企 業	
1,000,000円	50,000円
関彰商事株式会社	株式会社高島屋 法人事業部
500,000円	20,000円
株式会社紀伊國屋書店	佐川急便株式会社
個 人	
500,000円	10,000円
森 征一	清宮 一彦*
230,000円	9,000円
稲葉 孝子*	久松 雄大*
180,000円	4,000円
竹中 治利*	坂井 知志*
100,000円	芳名のみ公表
中村 和彦*	工藤 典人*
50,000円	齋藤 美知代
川津 園恵	清水 敏成*
30,000円	関 いづみ*
大貫 智之	高橋 征子
20,000円	高橋 良征
大槻 行徳*	千葉 茂*
関 敦央*	長南 直宏*
18,000円	
鈴木 辰一*	

諸澤幸雄奨学金の創設・充実 累計寄付金額 59,209,326円

◎「教育実践研究所の行う事業支援」、「諸澤幸雄奨学金の創設・充実」それぞれについて、複数回お申し込みくださいました方は芳名に*を付し、金額は累計額を表示いたしました。

■寄付金のお願い

2009年11月より、諸澤幸雄奨学金制度の充実および継続的運営を目的とした、開学100周年記念事業募金が始まりました。皆様におかれましては、ご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【寄付金の申し込みおよび問い合わせ】

学校法人常磐大学 寄付資産運用課

TEL. 029-232-2759 E-mail: kif@tokiwa.ac.jp

寄付募集の詳細については、ホームページをご覧ください。

<http://www.tokiwa.ac.jp/>

編集後記

芸術から、現代社会で重要視される生産性や効率性を見いだすことは困難です。しかし、第3回開学100周年記念講演会で藪野健先生が語っていたように、芸術は人が生きる上で重要な存在。複雑化する現代社会では、芸術を通して自分と向き合うことが重要なのだと、藪野先生の言葉に気づかされました。